

愛知シニアクラブ

2017年度学習会

認知症患者への介護問題

愛知シニアクラブは、3月25日（土）「ワークライフプラザーれある」を会場に会員並びに地協役員43名の参加で、2017年度学習会を開催した。

講師には看護師の今井恵子氏（名古屋市熱田区いきき支援センター）を招き、2時間に亘り講義を頂いた。

わが国は高齢化の進展と共に、2030年には認知症の人が744万人に膨れ上がると推計されており、社会問題化の背景になりうる要素を秘めている。認知症になっても、安心して日々を暮して行けるよう認知症についての正しい知識を持ち、認知症の人や家族を温かく見守り、支える手立てを知って頂くことが学習会の狙いだ。また、本学習会は「認知症サポーター養成講座」の位置づけもあり、幅広い見地からの講演内容であった。

- (1) 認知症とは、老化による物忘れとは違い、脳の神経細胞がいろいろな原因で、死んでしまったり、働きが悪くなったりしてネットワークが損傷されることで、障害が起こり生活をするうえで支障が出ている状態。例：老化＝朝ごはんを食べた物を忘れている。昔活躍した歌手の名前が思い出せない。認知症＝朝ごはんを食べたことを忘れている。
- (2) 認知症の症状では、本人の性格、人間関係、取り巻く環境要因が絡み合っ、うつ状態や妄想などの精神症状や、徘徊、興奮・暴力、不潔行為など、日常生活を困難にする行動上の問題が起こる。(3) 認知症の人への支援では、さりげなく援助できる「人間の杖」となること。つまり、街のあらゆるところに暖かく見守ってくれる環境を作ることや認知症という病気を理解し、今まで通り友達・友人Aさんと障害を補いながら付き合う。
- (4) 認知症の介護では、本人の言動を一方向的に避難しない、従前と変わらない「個人」として接する、思いを共有する。

高齢者が高齢者を介護する「老老介護」は今や逃れない現実となっている。家族だけでは到底十分な介護は出来ない。介護保険、養護老人ホームなどの施設介護も限界がある。

だが、認知症状を呈した高齢者にどう接するべきか、「人間」としての尊厳をどう保っていくか新しい施策が必要であると結んだ。

認知症患者を地域で見守ることが必然的な社会の流れしなければならないこと、試行錯誤しながら地域での環境づくりが肝要であることを学んだ。

